

青山学院女子短期大学同窓会関西支部および中国支部卒業生 聞き取り調査のまとめ

－1964（昭和39）年から1973（昭和48）年卒まで

趙 慶姫

1. はじめに

本稿は関西支部の卒業生5名および中国支部の卒業生5名、計10名からの聞き取りのまとめになる。サンプル数が少ないこともあり、支部としての特徴が顕著というほどではないと考え、両支部をあわせて卒業年順に並べて、10名の内、1960年代の卒業生5名をA～E、1970年代の卒業生5名をF～Jとした。卒業年、学科、在住県は次のとおりである（在住県は調査当時）。聞き取り調査は短大同窓会支部総会の前後に行っている。本稿の調査を行なった2023年、2024年については、関西支部総会はいずれも大阪市、中国支部総会は松江市、岡山市での開催で、調査もそれぞれの市で行った。

聞き取り対象者一覧

	卒業年	学科	在住県	支部
A	1964（昭和39）	英文	兵庫県	関西
B	1965（昭和40）	英文	大阪府	関西
C	1967（昭和42）	英文	島根県	中国
D	1968（昭和43）	国文	兵庫県	関西
E	1969（昭和44）	教養	島根県	中国
F	1971（昭和46）	家政	広島県	中国
G	1973（昭和48）	英文	京都府	関西
H	1973（昭和48）	国文	兵庫県	関西
I	1973（昭和48）	教養	島根県	中国
J	1973（昭和48）	教養	島根県	中国

第2期で対象とする卒業生が学んだ昭和40年代は、受験者数増加に伴い、短大が定員を次々と増やした時代である。1950（S25）年に文科国文専攻50名、文科英文専攻100名、家政科100名の250名定員でスタートした短大は、1950年代に国文専攻、英文専攻それぞれが2回にわたり増員している。1962（S37）年に文科が国文科と英文科に分かれ、定員50名の児童教育科が開設された。1966（S41）年に家政科が増員、この年定員80名でスタートした教養科は1968（S43）年には定員を増やし、国文、児童教育も増員、定員合計が

700名となった。本科の各科に合わせて1962年、64年、69年と専攻科が開設され、69（S44）年には各科の名称を「学科」と改称している（本稿では両方の名称を使用している）。

設備面では、北校舎は1961（S36）年に建設されていたが、66（S41）年に管理部門を収容する本館、67（S42）年に家政科の特別教室を備える南校舎、69（S44）年には教育研究棟、図書館棟、講堂が次々と完成としている。学生数の増加に伴う後追いという形ではあったが、教育環境が整備されていったのも昭和40年代である。今期の調査協力者は、このような発展期の短大で学生時代を過ごしている。元短大学長・八耳俊文は青山学院女子短期大学70周年記念ギャラリー展のパネル¹に、「この時に青短時代を過ごした学生は次々と現れる建物に新しい時代を感じたのではなかろうか。」と書いている。まさにそういう空気のもとで学生時代を過ごしていたであろうということが、調査の中でも感じられた。

2. 出身高校と進学状況

本稿の協力者10名の内、支部内または支部外の県立高等学校を卒業しているのは兵庫県立のA（S39卒）、鳥取県立のB（S40卒）、長崎県立のH（S48卒）、島根県立のC（S42卒）、I（S48卒）、J（S48卒）の6名である。IとJは同じ高校の同期で、県内屈指の進学校だった同校からはこの年、11名が青短に進学している。女子の場合、教員志望者は島根大学に進学したが、それ以外は島根県立女子短大への進学が多く、この年、青短への進学が多かったのは例外的だったとのことである。同期の12名が渋谷にあった島根会館に泊まり込み、東京の短大を掛け持ちで受験した。Iは「青短より偏差値が高かった」東京女子大学短期大学部にも合格したが、「みんなで『青短に行こう』ということになった、東短は三鷹で田舎だと思った」と語っている。

同じ島根県立でやはりトップクラスの進学校を卒業しているCはIとJより6歳上である。やはり女子にも教員志望の四大進学者はいて、多くは関西止まりだったが、自分の友人には東京の女子大、共学大に進学した者もいたという。鳥取県立のBは女子の進学者の大半は地元の短大で、島根が近かったのも男子は島根大学が多かったという。同期では4人が青短を受験し合格したのはBだけだった。兵庫県立のAも、男子を含め東京進学は少なかったと述べている。長崎県立のHは、「がちがちの進学校ではなかった」高校で、女子の四大進学は珍しく、多くは長崎の短大への進学だった。青短進学は自分が初めてだったようで、「東京に行くのに短大？」と言われたとのことである。

残りの4名の内、いわゆる団塊の世代にあたるD（S43卒）とE（S44卒）は東京都立高校を卒業している。どちらの高校も前身が旧制女子高等女学校だったことから、女子の人数が多かった。Dの高校は世田谷にあり、9クラス中、女子3クラスは就職希望がほとんどだったという。Eの高校は浅草にあったことから、12クラス中、芸能・就職クラスが1クラスあったが、他は国立大進学が多く、女子も四大進学が多かったという。Eの高校

は戦前からの名門校だったということもあるのかもしれないが、当時、世田谷あたりは郊外でのんびりしている雰囲気があったのだろう。同じ都内でも女子の進学状況に違いがあったことは地域差も関係しているのかもしれない。

F (S46卒) と G (S48卒) は首都圏のミッション系私立女子高校の卒業である。どちらも進学校で、Fは四大、短大が半々ぐらい、Gは四大進学が多かったと述べている。

日本の高度経済成長期の後半にあたる昭和40年代は、大学進学率が急増した時代であるが、公立と私立、首都圏と地方の差はあるものの、まだ女子の四大進学は多くはなかったといえるだろう。

3. 志望動機と学科の選択

短大に進学した理由、動機については、1. 四年制も視野に入れていた、2. 親やきょうだいの勧め・家庭の状況、3. 学科への興味・青山への憧れという3つに分類してみる。

3.1 四年制も視野に入れていた

A (兵庫県出身) は、東京出身の父が、子どもを四年制大学に行かせて仕事で自立させる方針で、姉たちは四年制大学に進学している。四女のAも四年制を受験するが事情があって中断し、滑り止めの青短英文科に入学した。後述するが、卒業後、青山学院大学第二文学部に編入学している。B (鳥取県出身) の両親は大学にいくなら島根大か鳥取大で、家から出ることは反対していた。Bは親の過保護・過干渉を嫌い、都会に出たいと思っていたところ、母方の叔父が東京で暮らしていたことから許しが出た。経済的に独立するために就職に有利という理由で青短英文科を選択した。

二人に共通するのは、「職を得て自立するため」というはっきりした大学進学の目的をもっていることである。第1期の世代 (昭和20～30年代卒) にはあまりみられなかった傾向ではないだろうか。

3.2 親やきょうだいの勧め・家庭の状況

C (島根県出身) は、東京の大学に進学していた二人の兄から「女の子は青短だ (受けろ)」と言われ、自分も妹も青短に進学している。英文科を志望し、高3では英語の家庭教師について受験に備えた。

D (東京都出身) は四年制に行きたかったが、明治44年生まれの父が進学を渋り、女学校卒でもっと勉強したかった母の後押しによって短大進学が可能になった。国文志望で、短大が就職に有利ということは入学後に知った。ちなみに4歳下の妹の時は父も四大進学を反対しなかったそうである。

H (長崎県出身) は、やはり地方は狭いので長崎から出たかった、親は反対するかと思ったら短大ならいい、寮じゃないとだめだと言われた。当時、大学受験ラジオ講座を担当し

ていた森野宗明（1968-1980.6：専任期間、以下同様）が素敵で、この先生に学びたいという思いで国文学科を志望したと語っている。

I（鳥根県出身）は、東京に進学している兄のもとを何度か訪れて絶対に東京だと思っていた。両親は「どこにでも好きなところへ行け」といていたが、2年の期間限定だった。子どものころからアナウンサー志望で、キー局の採用に短大卒が多かったことも理由だった。教養学科で西洋思想史のゼミを選び、「それを学んでいる自分が好きだった」とのこと。

J（鳥根県出身）は弟がいたため、薬学部なら四年制に行かせるがそれ以外なら短大と親から言われ、文系だったことから薬学は考えなかった。電車通学の車内で、同級生みんな「どこ受ける」という話をして、青短受験が大きなうねりになったという。青山といえば英文学科だったが自分は英語には興味がなく、教養学科を受けたのは、教養が身につくと思ったし、哲学にちょっとかぶれていたところもあったから。「青臭いところがあった自分が懐かしい」と述べている。IとJは前述のとおり同期で、同じ高校から教養学科に進学しているが、思想や哲学に触れた学生時代の自分に対する眼差しも共通するところがある。同じく教養科を選択した次のEも含め、当時、スタートしたばかりの新しい学科の熱い思いに対して、集まってきた学生たちが魅力を感じていたことがうかがえる。

3.3 学科への興味・青山への憧れ

E（東京都出身）は7人兄妹、自営業を営んでいた親からは自分で考えてやりたいことがあれば何をしてもよいと言われ、進学先も自分で決めた。都立の進学校に通っていたが行きたい四大はなく、前年にできた教養科にはいろいろな講師がいて魅力だったという。講師陣に漢文学の小林信明（兼任1960-81）や加藤楸邨（健雄／1954-73）の名を見て、この先生から学びたいという思いで進学した、今から思うと贅沢だったと述べている。多様な専門分野で構成されていた教養科の真髓が感じられるが、高校生のEがこれらの学者の名前に惹かれて進学を決めたと聞き、その知的好奇心の高さに驚く。

F（神奈川県出身）は高校がミッション系の女子校だったことから、青山への憧れがあった。四年制の薬学を受験して不合格だったが、父親も四年制より短大の方がいいだろうという意見だった。化学などのカリキュラムがあったことから家政学科を選んでいる。

G（東京都出身）もミッション系の女子校だったが、所属していた聖歌隊の学校交歓会で青山の高等部を訪れ、案内の女子学生の対応が素晴らしく青山に一目惚れした。高2の時に父親が急逝し、勉学に励む気力がなくなり、母の負担も考えて短大にしたとのこと。外国への憧れ、アメリカナイズされた社会に憧れ、英文学科を選んだという。

自分自身の興味や純粋な憧れが進路を決めた主な理由となっているこの3名が首都圏出身であることをふまえると、サンプル数は少ないものの、昭和40年代、女子の進路選択の自由度に地域差があったことの表れといえるかもしれない。もっとも、地域差は当時に限らず現在もあるのだが。

4. 短大生活で記憶に残っていること

ここでは調査項目の「特に記憶に残っていること」から、授業および先生の思い出と、授業外の活動・体験に分けて紹介する。

4.1 授業および先生の思い出

本節は学科別にまとめる。第1期の報告でも書いたが、今期においても、卒業生たちがつい先日のことのように、授業や教員の思い出を楽しそうに話す姿が見られた。よく憶えていることに感心するが、それだけ短大での学びが印象に残っており、その後の人生にも影響を及ぼしていることを表しているといえるだろう。

4.1.1 国文科・国文学科

国文科は研修旅行の思い出を語る卒業生が多い。Dは奥の細道をたどる研修旅行で作った俳句が加藤楸邨の選に入ったそうである。馬越宮（1950-70）のゼミで卒論は『源氏物語』明石の巻。加藤の西鶴『好色一代男』が楽しかった、クラス担任だった青木孝（1957-82）の『古事記』なども記憶に残っていると語っている。勉強が好きだった、短大での勉強はとても楽しかったという。Hの研修旅行は紀伊半島だった。勝浦の方から熊野三山的那智の滝の方に行ったり、高野山の宿坊に泊まったり、盛りだくさんで楽しかった、あんな旅行はなかなかできない体験だったと振り返っている。

4.1.2 英文科・英文学科

Aは、後から考えると一番影響があったのはエリザベス・クラーク（Clarke, Elizabeth J. 1962-64, 1972-92）だったと述べている。後述するが、Aは後にフェミニスト・カウンセリングを学び、女性運動に従事する。クラークが青短で「女性学」を担当したのは1986年からで、1964年卒業のAが学生時代に直接、女性学を学んだわけではない。卒業後40～42歳の時に夫の転勤で東京に住み、その時にクラークがジェンダー研究をしていることを知ったそうである。印象に残っている先生だったので「そういう方だったんだな」と思ったとのこと。学生時代に教わった教員の研究分野を卒業後に知り、それが人生に影響を及ぼしている。学生と教員の関わりは、在学している2年間だけでないこと、また20歳前後の学生に与える印象がいかに強いものをあらためて感じるエピソードである。

その他に、サリンジャーを勉強した松宮薫子（1954-71）、世阿弥の授業を行なった川瀬一馬（1950-74）が印象に残っているという。アドバイザーの青木範夫（1961-63）から、イギリスで起きた「怒れる若者たち」という文学運動を知り、それで戯曲を読むという体験もしている。尾瀬散策のとき多和はる（1951-1986）に「あなたたちこれから社会に出て、結婚したらあまり旅行することもないから」と言われ、「女の人生ってそんなに堅苦しく、狭苦しいのか」と思った。職場復帰の道が断たれたときや子育て中にこの言葉を思い出したとのことである。

Bは多くの教員の名前、授業の印象を鮮明に覚えていた。やはり川瀬の世阿弥の授業が

印象に残っていて、川瀬の気難しいところ、その反面、世阿弥にベタ惚れしているところが学者らしいと思ったと語っている。英会話の若いサッチャー(Thacher, Juliana 1962-65)は発音が明瞭で聞き取りやすかった。ハークネス(Harkness, Lucetta M.K. 1960-67)はいい先生だったが、年配で聞き取りにくかったという。松山正男(1959-63)は元気で楽しい授業、「青山に入学して、今困っていること」を日本語で書くという試験だった。過保護・過干渉の親や田舎の人間関係から解放されて伸び伸びと感じていたことから、親と離れて東京で素晴らしい経験をしている、と喜んで書いたところ、最高ランクの成績がつけられ、このことが今でも誇りとなって自分を支えているとのこと。後に教育テレビで松山を見かけ、うれしくなり、その番組をずっと見ていた。「青山ってすごい」「行ってよかった」と思ったそうである。英語科教育法の大沢茂(兼任1960-86)がジェントルマンだった。菊地裕(1950-79)のアドグル旅行で那須に行き、そこで観光用馬車に乗った。キリスト教学は荒井献(1964-65, 1967-68)だった。

Cは卒業論文で女性のアメリカの作家、ウィラー・キャザーについて書いた。多和によるスキースの授業で妙高へ行ったり、社交ダンスも習った。多和のスキースクールには2回参加し一番印象に残っていて、今もスキーに行っている。

Gは小田島嘉久(1955-73)のアドグルで人数は5～6人だった。西島正(1950-66, 1970-73)の授業では卒業時にシェークスピアを読んで小論文の形で提出した。フランス語はもっと真面目に勉強しておけばよかったと後悔している。

4.1.3 家政学科

化学のカリキュラムがあることが学科選択の理由だったFは、島崎通夫(1950-92)の栄養学をとった。専攻科の先輩と一緒に実験を行ったと言って、持参した実験室の写真を見せてくれた。この実験室は前述、1967年竣工の南校舎の特別教室であり、1969年に入学したFはこの新しい校舎で学んでいる。アドグル、ゼミも島崎で、春になると神宮外苑の花を見に行くなど一緒に近くを歩いた。島崎以外、他の教員とも外に出ることがあってよかったとのこと。島崎は家のことも話し、それについてグループの友人とよく話した。島崎の話がいつも心に響き、とてもよかったと語っている。

調理の野村万千代(1950-75)と大西セチ(1950-77)が、印象に残っていて、和服を着て、基礎を教えてくれて本当によかったとのこと。料理などしたことがなかったが、でもできるんだ、と思った。習った料理を正月に作って母に喜ばれたそうである。西洋料理の本をとってある、あとから役にたったと述べている。

4.1.4 教養科・教養学科

1966年開設の教養科の卒業生は、昭和20～30年代卒業を対象とした第1期では登場しなかったが、本稿の協力者には3名いる。

1967年入学のEは、開設されて2年目の教養科で学んでいる。梶井基次郎が好きで、卒業論文でそれを書くために平井照敏(1966-93)についたそうである。教養科のゼミは1年次から始まるが、入学間もない時点で卒業論文のテーマがはっきりしていたということ

は、3.3にあるように、新設の教養科講師陣の名前をみて進学を決めたというEらしい。国文科の学生と一緒に平井の自宅に行ったこともあり、言葉一つ一つ、丁寧にいろいろな話をしていたという。立ち上げて2年目、2期生だったので教員たちがこういうこともやってみようと、活力があったとのことである。小原信（1967-79）が八岐大蛇の話は斐伊川の氾濫のことだという話をして面白かったが、卒業後に出雲に来て実感したのはご縁だったと語っている。

Iは小原の西洋思想史のゼミで2年間過ごし、1年次ではキルケゴールで25枚、卒業時にはカントで50枚の論文を書かされた。西洋思想史や哲学が得意というわけではなかったそうだが、3.2に書いたとおり、「それを学んでいる自分が好きだった」とのことである。小原は教養学科の他の学生にも強い印象を残し、20年ほど前、大山で中国支部総会が開催されたとき、本来、派遣教員を指名することはできなかったが、教養学科出身者たちが「結託」して、小原派遣を切望して実現させたとのこと。小原ゼミでとくに優秀なわけではなかったが、この同窓会するとき「強烈に覚えている」と小原から言われたと語っている。

Jは、卒業論文は哲学ですごく有名な先生だった、教養学科には多様な学びがあり、優秀な学生が多くついていくのに一生懸命だったと述べている。高校が進学校で、一部のできる人たちと比べて自分は劣っていると感じており、短大でも勉学の面で苦労したが、当時、後悔したことはなく、やはりここを選んで良かったと思ったとのこと。コンプレックスを感じながらも精一杯学びたいという思いを持ち続けることができたのは、短大の、教養学科の魅力があってこそだったのだろう。そういう学科で学んだことに対する自負、苦労しただけに得た自信が大きかったことを感じた。

4.2 授業外の活動・体験

本節では1. クラブ活動・課外活動、2. 友人、3. 寮、4. キリスト教・信仰、5. 学生運動の項目ごと、なるべく協力者から聞き取ったままの言葉遣いで思い出を紹介する。

4.2.1 クラブ活動・課外活動

A（英文）：中高とテニスをしていたので、軟式テニス部に入部。遠征費用は国際電話交換手のアルバイトで稼いだ。

D（国文）：手芸部に属し、文化祭の時に刺繍入りのエプロンや文化刺繍を展示販売した。指導の先生はいなくて、国文の学生も少なく、大半は家政と児童教育だった。

E（教養）：日本橋に住んでいたのも、子どものころから母親と一緒に買い物のついでにデパートで開催されていた美術展によく行っていた。クラブ活動は大学の「古美術研究会」。京都や奈良の合宿で滅多に行けないところに行けるのが魅力だった。年に1回の合宿だけでなくグループでも出かけ、京都で、ある大学の先生から貴重なお茶碗を見せていただき、扱い方を教わったことが今でも印象に残っている。見も知らぬ学生によく体験させてくれたと思う。

- F（家政）：それまで運動することがなかったのが、誘われて軟式テニス部に入ったことが、青短に入って大きく変わったこと。今だったらちょっと恥ずかしいが、「ファイト！ファイト！」と言いながら、ランニングで神宮まで行き、向こうで柔軟運動をしてまた戻ってきた。合宿が大変で、日焼け止めを塗るようなことはしなかったので、日に焼けて、皮が剥けるほどだった。1週間ぐらいだが練習ばかりできなくて、早く帰りたいと思った。
- G（英文）：クラブ活動は四大との合同の「グロリアス・クワイア」で、童謡、聖歌、讃美歌で孤児院などを慰問した。国立療養所多摩全生園に何回か行った。入居者の方からお茶を出させていただくことができなかったが、先輩がそれは当然なんだと言ってくれた。「人生で初めてそういう人に会った時、拒否したいという気持ちは誰でもある、社会を見ただろう？」と言われて、理解してくれる先輩がいて安心した。ハンセン病のことが新聞に載ったり話題になったりした時、理解する上でこの体験がいいことだったと思った。
- H（国文）：友達が「大学の部活に入らない？」と誘ってくれたけれど、ロン毛で髭生やしてタバコ吸っているような人がいっぱいいて怖くて、真面目な田舎の高校生だったので拒否感があった。ダンパには参加して、寮でダンスの練習もした。コンサートやライブにもよく行った。
- I（教養）：2年間の東京生活は貴重なので、大事にしようと思った。吉田拓郎が広島から出てきた年でもあり、加藤和彦などフォークソングのコンサートがどこかの大学の講堂で500円程度だったので、毎週のように出かけた。寮の飯久保澄先生に頼み込んで、帰寮を延長してもらい、会場から大慌てで帰ってきたりした。
- J（教養）：部活はしていなかった。玉川寮では夕飯の当番もあった。いつも通っている渋谷はそうでもなかったが、なにかの時に表参道に行ったらすごいなあと感じ、2年次の後半になるとこの魅力的な街から離れたくないと思った。

4.2.2 友人

- C（英文）：高等部出身の方たちがきれいにお化粧をしていて、田舎者だった自分は恥ずかしいような気がした。東京出身の友人と仲良くなり、夏休みには各地に遊びに行った。みんなが出雲に来た時は、兄が車を運転していろいろなところをまわった。
- D（国文）：ゼミよりもクラスの仲間が仲良しで、渋谷駅のそば、坂を下りてちょっと横に入ったところにあった東宝パーラーにあんみつを食べに行ったり、休講になると文化会館の名画座に行ったりした。あとは学校と家の往復で、授業でかなり忙しかった。
- F（家政）：学科と軟式テニス部の友だちが良かった。半分ぐらい地方出身で、下宿先に遊びに行ったりした。
- G（英文）：同じクラスの岩手県、静岡県、大分県が二人、あと横浜市、この仲間とは今もお付き合いしている。多感なときなので、人生とは、愛とか奉仕することとは、神様は何とか、いろいろな話し合いをした。授業よりもアフタースクールでの人との交わ

りが印象に残っている。

J (教養)：びっくりしたのは高等部出身の裕福な人たち。世の中にはこういう人たちがいるんだな、神様は平等にはしないのだなと感じた。

4.2.3 寮

B (英文)：もともと家から出ることに親が反対だったので、シオン寮に入れなかったら入学を辞退させられるところだった。6畳に4人だったが、4人兄弟で育ったので難なく適応できた。18時の門限を過ぎても施錠されるわけではなく、寮監が奥の和室に入った隙に忍び込んだこともあった。寮では月1回、外部から教師・牧師を招いての夕拝があった。野呂芳男先生(兼任1961-63)の夕拝は厳しく、怖かった。

C (英文)：短大事務長・加藤悦子さんのご自宅を準寮としていたところに入寮した。2階の6室に12名。朝食、夕食は先生宅のおいしい手料理で、楽しみでもあり、皆で和やかな会食。片付けは当番制だったのが懐かしい思い出になっている。同学年の4人は何度と一緒に旅行をしたり近況報告をしあうなど、今でも交友関係が続いている。

H (国文)：先輩2人、新入生2人の4人部屋。2段ベッドの時代で先輩は下、1年生は上と決まっていた。先輩は大人でいろいろなことを教えてもらい、他の方の経験を聞いて刺激になった。寮にはいろんな先生がお話しに来てくださった。高橋好子先生(1963-1999)、掛井五郎先生(1962-1996)。今でも、寮にいた人と寮の話をすると盛り上がる。短大閉学にともないシオン寮が閉寮した際の閉寮式にも、上京して参加した。

I (教養)：シオン寮に同じ高校から4人入ったので、いつも同じ仲間とつきあっていたが、今はそれをととても後悔している。年に2回、歌舞伎観劇などがあり、弁当付でドレスアップして行った。「やっぱり東京はすごい」とカルチャーショックを受けた。

J (教養)：シオン寮を希望していたが入れず、二子新地にあった玉川寮を案内された。20名の青短生のうち15名が1年生で、寮に帰ると色々な部屋からおよびがかかってお喋りした。クラスではそれほど友だちの付き合いはなかったが、寮の友達が良かった。今でも2年に1回、東京で会っていて、同じ釜の飯を食うということは、これだけ強いつながりになるということを実感している。もちろんいろいろあったが、多感な時期に仲間が多くて良かった。東横線の電車が混んでいて、都会の人は大変だなと思った。

4.2.4 キリスト教・信仰

C (英文)：実家は浄土真宗だったがキリスト教にも違和感がなく、キリスト教に基づく寮の生活も普通にしていた。

E (教養)：何の神様かに関わらず大事な人がいることは大きい、何かあった時にその方に問いかけるということは大事。聖書は信仰というより、本が好きなのでストーリーとして読んだ。

F (家政)：自分がクリスチャンということで(高3で受洗)友達から浮いてしまうと感じたのか、学校の礼拝には友達が行かないなら行かないという感じだった。中高でキリスト教に接していたが、教義まで学んでいたわけではなかったので授業でキリスト教を

学ぶことは、少し難しく感じた。

G(英文): 高校までに信仰の種を蒔いてもらったということはあるのかもしれないが、あまり強制的に厳しくされると反発してしまい、青山に入ってからの方が、自分の心を開いて礼拝に出た。四大の礼拝堂は木造で静かだったので、授業が重ならない限り、四大の礼拝に出た。当時は、信仰の確信がなかったので、ペギー葉山さんの『学生時代』の歌詞に憧れて、自分がヒロインのような思いで礼拝堂に座ったらこんな感じなのかなと思った。メッセージ自体を自分の生活の中に受け止めるところまではいかなかったが、自分が青学にいる以上、そういう教育理念に素直に入って、プレゼントをいただけるんだなあという気持ちで、できるだけ礼拝に参加したいと思った。

4.2.5 学生運動の思い出

F(S46卒): 学生運動のため正門から入れなかった。内ゲバのようなものがあって、短大の食堂の方にも男の方が来て少し怖かったが、いろいろ考える機会になった。大学の方は授業がなかったようだが、短大は授業があった。親は青山だからそれほど激しくないだろうと思っていたようだが、実際には結構動きがあった。

H(S48卒): 学生運動の真っ只中。短大と四大の間に塀があって、警備の人、機動隊が並んでいた。裏門から入って短大に行くだけで大学の方には抜けられなかった。機動隊の隊員が妙に馴れ馴れしく挨拶していたことを憶えている。

5. 卒業後のライフキャリア

昭和20～30年代卒業を対象とした第1期の調査で、筆者は東海支部の10名について取りまとめを行ったが、当時の親の世代にとって結婚前に女性が働くことが考えられなかったところ、働きたいという思いをもっていた卒業生が多かったと報告した。今期の調査では、就職に有利ということで短大を選ぶなど、女性が大学卒業後に就職することは当然となっていて、社会の変化が明らかである。しかし結婚・出産退職が多いことは第1期と変わらない。

またサンプル数が少ないため差があっても僅かであるが、第1期全体と比較して、学生時代に東京で知り合った結婚相手が地元に戻るようになった例が増えたり、社内結婚が登場したりしている。見合いや紹介による結婚が当然だったと調査協力者が語っていた第1期との違いがみてとれる。

5.1 東京での就職、結婚退職

経済的な自立を目標としていたBは賃金の高いところを目指して東京の銀行に就職、英文科の学びを活かして外為、輸出チェッカーの部署に勤務する。叔父の家からの通勤として自宅通勤の条件をクリアし、半年後に転居して自立を果たす。3年間勤めるが、短大1年次にアルバイト先で知り合った関西出身、大阪勤務の夫との結婚を機に退職している。

同じく銀行勤務では、東京出身のDが就職課の職員の勧めで信託銀行に就職している。当時、英文科を対象とする商社や銀行の求人が多く、Dは国文科だったが、2年生になる前の春休みに短期で虎ノ門タイピスト学校に通ったこともあり、本店の外国営業部に配属されている。5年間勤務し、社内結婚で退職した。夫のロンドン駐在で6年間滞在し、その後、子どもが中2、小5の時から3年間、転勤で再びロンドンでの生活を経験している。1995年に阪神・淡路大震災が発生、義母が一人で暮らしていた夫の実家が被災したため、夫と娘をロンドンに残し、息子と帰国した。義母が子どもの頃から住んでいた古い建築だったため、損傷が大きかったそうである。

東京出身ではGが日本橋の丸善に勤めている。商社などの採用試験を受ける周囲に対して、社会奉仕がしたいということからユニセフへの勤務を希望していたが、その年は募集がなかった。兄のアドバイスで丸善を受け人事で採用されたが、英文学科での学びをいかしたいと洋書売り場への配属を希望した。仕事にも慣れ、テニス部にも入っていたが、夫と出会い結婚、海外赴任に同行することになり2年で退職。「まだ22・3歳で自分の人生はどうなっちゃうのと思ったが、海外に行くということが勉強になるなと思った」と述べている。夫の父親が亡くなり1年で帰国、京都で義母と一緒に暮らすことになった。

CはJALのキャビン・アテンダントとして勤務。強い希望があったわけではないが、友人が受けるというので一緒に受けたら自分の方が合格してしまったという。父との約束で3年間の勤務だったが、当時は長く勤めるより結婚退社が多かった。国際線での和服着用、森英恵デザインの制服、タクシーでの出勤など、CAのイメージ通りのエピソードが語られ、充実した体験をC自身が楽しんでいたことがうかがわれた。地元出身、東京の大学でCの兄とつながっていた夫と知り合い、銀行員の夫の留学中は実家で花嫁修行、のち結婚。

5.2 地元での就職、結婚・出産退職

3.1で述べたとおり、仕事で自立することを考えていたAは青山学院大学第二文学部に編入学する。短大の授業が密だったおかげで編入学試験に特別な受験勉強は必要なかった。学問的に深まったが、友人や教員との関係は短大の方が良かったという。東京で就職活動をするがうまくいかず、西宮の実家に戻り、外資系海運業の企業に就職する。英語の能力をいかした仕事を結婚後も続けるが出産を機に退職する。オーナーから「子どもは3歳まで親がみるべき、3歳になったら雇うから」と言われて、当時の労働基準法の規定どおり産前6週間前まで勤務を続けて退職したが、再就職は叶わなかった。

Iは、1970年に開局した島根県初のテレビ局に、1973年、アナウンサーとして採用された。当時の島根は放送局も新聞社も全て縁故採用で、Iも役員に父の知り合いがいてコネ入社したというが、子どものころからアナウンサーを志望して放送部に所属したり、短大時代に東京アナウンス学院にも通ったりしたIにとっては、強い思いをもった就職だっただろう。しかし、女子アナウンサーは3年で辞めるという当時の慣例にしたがって、結

婚を機に1年間の嘱託勤務を経て退職した。

長崎出身のHは、名古屋に移転していた実家に戻り、その頃、一番採用が多かった損害保険会社に自宅通勤で就職した。父親は自分の勤務先と同じ系列だったので喜んでいて。2年勤めて社内結婚。転勤が多く、川崎、岐阜、熊本、芦屋、西宮、横浜、名古屋、岐阜での生活を経て、夫の実家は多治見だったが、義母を看取ったあとは夫も故郷に執着がなかったもので、今までで良かったところということで関西に住むことにしたという。

5.3 結婚後も働く、結婚後に働く

Jは4.2.1にあるように2年次の後半になると東京から離れたいと思ったが、時すでに遅し。父親が地元の銀行に就職を決めていた。そこを1年で辞めて、父親の紹介で県庁の外郭団体に入り、27歳で見合い結婚した後も続けて13年間勤めている。当時は25歳を超えると周囲からいろいろ言われて大変で、晩婚といわれた。勤務先は県職員と同じ良い待遇で続けたかったが、夫が本家の長男で、義母が病気になったため、悩んだ末、断腸の思いで辞めた。義父・義母とも比較的早く亡くなり、大変だったが夫のきょうだいたちも自分に感謝してくれているという。当時、結婚後も仕事を続けることは珍しかっただろう。地元で就職、地元で結婚というケースだからこそ同じ仕事を続けることができたのだが、辞めざるをえなかったJの無念さが推し量られる。

Fは学校求人でメーカーの秘書として採用され、横浜市の自宅から新橋の勤務先に通った。学生時代に知り合った夫は長男で実家が遠方であることから、Fの両親は結婚に反対していた。結婚して横浜で9年間暮らした後、夫が呉の実家の家業を継ぐことになったが、その夫が40代で亡くなり、義弟が社長を継いだ会社でFが働き、子どもを大学まで通わせた。今は、その子どもが会社を継いでいるという。2022年に義父を看取り、今、義母と二人で暮らしている。結婚にあたって父親から「何を考えているんだ、そんな馬鹿だと思わなかった」とまで言われたそうだが、結婚後の波瀾万丈な人生は当時の親の心配を超えていただろう。

ユニークなのはEである。大学のクラブ活動で知り合った夫が大学卒業と同時に、実家である旅館のリニューアルオープンのため出雲に帰ることになっており、東京の下町で育ったEは卒業後1年で結婚、松江市で暮らした。「若気の至りだったのか運命の赤い糸だったのかわかりません」と笑いながら語っている。予想もしなかった世界に踏み出すことを意味する結婚を決心させたのは、新しい環境への不安より、変化に対する期待が優ったのだろうと想像する。それは短大の2年間で自分が成長したことを実感していたからではなかっただろうか。

義父母、祖母、妹、弟とほぼ同居、隣近所皆親戚という環境だった。子どもが生まれてからは仕事を手伝わずに家庭のことをするように言われたが、30歳過ぎの時、両親が引退、夫婦で新しい旅館経営を模索する。「家業でなく企業にしよう」と、従来の旅館業界にありがちだった弊害をなくすべく勉強会に参加するなどして、変革していった。旅館は男の

人だけでは回らないという。Eの女将としての働きがあつてこそ、老舗旅館が発展的に存続したのだろう。子どもたちは旅館を継がないそうである。企業にしたことによって、子どもたちの人生に自由な選択を可能にしたともいえる。旅館は「三者一社員、業者、お客様一を大事にしないとうまくいかない」とのことだが、それに加えて家族も大事にしてきたEの生き方に敬服する。

6. 卒業後の社会活動・ボランティア・生涯学習

短大同窓会はその目的に「会員相互の交流・向上」「社会に貢献すること」を掲げており、本研究ではボランティア、生涯学習に関して調査している。ここでは特に青短卒業生の多彩な生き方を知るようになった。社会活動の特徴ごと5つに分類し、ライフキャリアとも関連させて紹介する。

6.1 自己確立と社会還元

Aは31～55歳、数学教師の友人と英数塾を開き、英語を教える。38歳の時、父親が亡くなり翌年受洗する。自分の自己分析だとして、地上の父がいなくなって天上の父を求めたのかもしれないと語っている。40～42歳の時、夫の転勤により東京で生活し、英数塾は中断。解放感があり、青学の公開講座に通う。転勤から戻り、ライフワークを見つけなければという思いで、関西カウンセリングセンターでユング心理学を学ぶ。中高、短大と卒業後もテニスをしてきたAはテニスのインストラクターも務めている。52歳で阪神・淡路大震災に遭遇し知人・友人が亡くなり大きなショックを受けたという。55歳からは日大の通信教育で英語の勉強をやり直し、大卒資格は持っているので卒業はしていないが、カズオ・イシグロの近作演習など、学びの中身は充実していたとのこと。

50歳の時、自己確立の手応えを得て、社会還元をしようと女性と子ども支援センター ウィメンズネット・こうべで女性運動を始め、DV被害者支援センターでシェルターをつくった。52～54歳、フェミニストカウンセリング堺で河野貴代美にフェミニスト・カウンセリングを学ぶ。ウィメンズネット・こうべではリーダー格を務め、昼夜を問わず、緊急保護、病院、警察などに同行し、激務だったが「放っておけないという気持ち一筋」だったとのこと。2018年、75歳を過ぎた頃、後継者育成のための講座を数々行ったが、コロナ禍により中断し、最近、第一線から退いたそうである。60歳からは家庭裁判所の調停員を始めたがDVの専門家とみなされ、調停離婚から自立までの長いプロセスに付き合い、心身のストレスが大きかった。54～71歳、神戸大学留学センターのカウンセラーも務め、カルチャーギャップの問題と、世界共通の問題の両面が存在したと語っている。

聞き取り調査を担当した輪島達郎研究員が「一般の対象者とは全く異なり、Aさん自身のキャリアや精神的成長の話に圧倒された」と調査報告書²で述べている。強い目的意識をもち自己研鑽に励み、それをいかして社会的弱者、特に女性に寄り添う活動を行ってき

たAの生き方に感嘆する。輪島は「30代での受洗、50代以降の『ウィメンズネット・こうべ』での働きや家裁調停員としての活躍には、エリザベス・クラークの大きな影響を見ることができる」と記している。4.1.2に書いたとおり、学生時代に直接学んだ分野ではないにも関わらず、卒業後に知った教員の活動が卒業生の人生に影響を及ぼしていることに驚き、教員としての責任感を覚えないではいられない。

6.2 地域活動に従事

Dは視覚障害者のための音訳ボランティアとして、市報を朗読しCDにして配布する活動を行っている。同窓会会報で音訳ボランティアの活動を知り、連絡を取ろうとしていたときに夫の2回目のロンドン転勤が決まり参加できなかったが、帰国後、市の朗読講座で講習を受け、市立公民館で活動しているグループの誘いを受けてボランティアを始めたそうだ。子どもも手が離れ何かしたいという気持ちがあり、同窓会会報のことも頭に残っていたという。市報のほか、視覚障害者福祉協会でも音訳のボランティアを行っている。さらに調査の2年前からは小学校での絵本の読み聞かせのボランティアも行っている。国文学科を選択したのも本を読むことが好きだったからだが、声を出すことも好きなことから音訳や読み聞かせを行っているとのこと。また趣味でコーラスグループにも入っている。音訳は、表、写真、記号の説明などもあって朗読とは異なるため、勉強したそうである。

横浜出身のFは地方都市での暮らしに悶々としていた。結婚に反対した実家の母親に、取り残されてしまうと愚痴をこぼしたら、「どこでも勉強はできる」と言われ目が開かれたという。社会とつながりたいという思いから、3人目の子どもが幼稚園に通うようになった頃から10年間ほど、通信教育の添削の仕事に就いた。5.3に書いたとおり、夫を亡くし、働いて子どもを大学まで出した後は、地域における活動に従事している。家庭裁判所の調停委員を10年間ぐらい務め、また市の教育委員として予算、教科書検定、学校をどうするか、いじめの問題など、月1回の会議で話し合う務めを担った。地方では地域の女性会の活動が盛んだそうで、旅行、日赤のボランティア活動、お年寄りが集まる場づくり、バザー、講演会などを行っている。

6.3 旧家の美術品の保存・整理

Cは、県議会議員となった夫が国際交流会長であったことから、ホームステイを受け入れた。出雲高校に通ったベルギーからの留学生とは、今も付き合いがあるとのこと。C自身がCAとして国際線に搭乗、子どもも高校の交換留学や大学留学するなど、国際的な家庭環境だった。

夫の家は400年近い歴史のある家で、広大な土地、多くの美術品を所有していた。義父が運営していた公益財団法人の美術館で、学芸員とともに展示替えを担当するなど、奮闘している。江戸時代の米倉、酒蔵を利用、改修したというミュージアムは、Webサイトで見ると旧家のたたずまいが美しい。文化財を残さなければという義父の思いを引き継

ぎ、「地方の美術品のありようを示そうと思っている」とのことである。小林瑞乃研究員が「日本にとどまらず海外で経験を積むことを前提に仕事も子育てもされて」きたことが「歴史と伝統ある出雲という地方の独自性を生かしていく視点に豊かさを与えているのかもしれない」と調査報告書³に書いているが、筆者も共感する。

一方、5.3のとおり松江市の老舗旅館を夫とともに企業化したEも、美術品に携わった。旅館の本店は、明治時代から松江にあった、横山大観も滞在した山陰随一の料亭だったそうである。リニューアル時に旅館の営業一本に絞ったものの、本店には掛け物や道具が多く残されていた。お茶どころの松江では古くからのお客から茶道具を貸してと言われることもあり、また床間のしつらいも時季に合わせて替えていく必要がある。学生時代から古美術に関心があったことが役にたった、今、旅館の仕事から離れたのを機に、嫁としてやっておかなければならない最後の仕事と思って、昔の料亭時代の道具や調度品の整理をしているとのことである。文化・芸能が身近な東京の下町で育ち、子どものころから美術館・博物館に通い、短大時代には古美術に触れてきたEが、松江という茶文化の伝統の地において歴史のある道具類と向き合うことになったのは、まさに天の配剤といえるのではないだろうか。

また旅館業の忙しさの中でも40代半ばから書道を習っている。署名をする機会が多いため、住所と名前だけ書けるようにと思ったのがきっかけで、義母が習っていた先生について。展覧会に出品する大きい作品は、旅館の宴会場に広げて夜中に書いたという。書の制作には見返りが無い、見返りがあるのは自分にだけ。制作に集中することが気分転換になっていた。また外に出てボランティア活動を行うことができない代わりに、定期的に旅館で捨てるタオルを自宅で洗って地元の老人ホームに寄付している。このホームは職員が元社員の娘さんだったり、入所者の中に何人か社員のOBがいたりして、地域のつながり、人のつながりを感じることができて、できる限り続けていきたいと思うと語っている。

6.4 同窓会活動

Hはカルチャーセンターで『源氏物語』を学んでおり、短大で古文に触れたからかなと語っている。小学校のPTAでは広報委員長を務め、新聞づくりが大変だったが、学校のこと、先生のことがわかって良い面も多かったという。夫の転勤で関西にいた20年ほど前に同窓会に参加し、その後10年ぶりに戻った時、手伝ってと言われて役員になった。1995年の阪神・淡路大震災の時は寄付を集め、被害に遭った方に見舞金を分配、親睦会でミニバザーを行い、売り上げをあしなが基金に寄付するなどの活動に従事した。

Iは小学校教員の夫の赴任に同行し、シドニーで3年間生活している。Iは子どもの頃から家族に依存されてきたそうで、実家において扇の要の役割を担っていたという。夫は山の中の集落、農村の出身で、結婚後は嫁の役割も加わった。そんなIにとってシドニーでの生活は、母親の依存や地域のしがらみから逃れることができた、自由で楽しいものだった。同窓会の県部会長、中国支部副支部長を務め、大学の陸上部が出場する出雲駅伝

にはいつも同窓会で応援に行っている。地域の福祉推進代表など地域活動の役員歴もある。

Jは5.3に書いた通り、結婚後も13年間仕事を続けた。20年ほど前に機械編みを本格的に習いに行き、いろいろな方と話をしたり、作品を見たりすることが生活の変化になっている。子どもに軽い知的障がいがあるため、自分が健康でなければという思いからフィットネスを続けているとのこと。県部会長のIと高校から一緒に、40代半ば、Iが役員を引き継ぐことになった時からずっと鳥根県で支部総会がある度に手伝っているそうである。

6.5 信仰

Bは30歳までに3人の子をもうけ、32歳で資格を取得し、団地の集会所でフランチャイズの子ども向け英会話教室を始めた。当時、子ども英会話教室はまだ珍しかったので繁盛したという。夫は会社を経営しており、45～50歳のころ自分で設計した家を建てるなど、何でも欲しいものが手に入ったが、「ほんとうに価値のあるものは何か」という疑問をもつ。クリスチャンではなかったが『長崎の鐘』の著者で松江出身の永井隆に傾倒した父親のもと、子どもの頃からキリスト教に触れていたBは、カリスチャペルの門をたたいた。教会はシオン寮と雰囲気似ていた。50歳で受洗し、以来、教会の仕事に携わってきたそうである。輪島研究員は調査報告書⁴で、受洗に至った背景には、父の影響や青短でのキリスト教学やシオン寮の夕拝を行った教員たちの薫陶もあっただろうと指摘し、短大とシオン寮で得た自信が、バブル崩壊後の経済的、精神的困難を乗り越える力をBに与えてきたと分析している。

ミッション系の中高から短大に進学し信仰を深めていたGは、旧家で義母と暮らすようになって般若心経を読むように言われる。近くにあったミッション系の幼稚園に子どもを通わせるのも義母にはあまりよく思われなかったが、「神様の導きだったか」夫がシドニー転勤となる。そこで教会に通うようになり、帰国するにあたって地元の教会を勧められた。長男である夫は母親との狭間で悩んでいたため、自分の道を突っ走るだけでなく良い証をと、子育てをしっかりとした後でもう一度夫と話し合い、受洗に至ったそうである。高2の娘と一緒に受洗したいと言って、親子で受洗した。30年近くたった今も教会の奉仕で忙しい日々を送っている。

7. 人生にとって青短とは

聞き取り調査の最後の質問は「自分の人生にとって青短とは」である。ここも一人一人から聞き取った内容を紹介する。

A：高校を出て、社会への第一歩を踏み出すときの礎が与えられた。与えられる喜びよりも与える喜びが遥かに大きいと学んだこともキリスト教と関係している。カウンセ

ラーとしてDVに対処する時も、社会正義や倫理観について、聖書に全て備わっていて、その礎が得られた。

- B：苦しいことがあっても、短大時代の充実した経験を思い出せば乗り切っていける。寮で4人部屋だったことも、人間関係の境界線をつくる上で役にたった。自慢できる。プライドの源泉。
- C：人（友達）との縁をいただいた。自分が人との交流を大事にするところは、英文学科、JAL、国際交流と、何か一続きになるところがあるのかもしれない。今でも中国支部5県で開催される支部総会にはできる限り出席するようにして、新しい出会いを大切にしている。
- D：勉強が好きだったので短大は勉強する場所だった。同窓会のつながりの中で、シオン寮や他学科の話など、自分が知らなかった短大の様子を知ることができるのが楽しい。
- E：年齢的にも20歳前後は人生の変わり目。違う自分の世界が広がった一つの転機。青山に行かなかったら、こちら（松江）にも来なかった。
- F：いい友達ができた。子育ての期間は会うこともなかったが、終わってまた会ったら、やっぱり青山のつながりを感じる。今の自分をつくっている。青山を出ているということで信頼される。女性の場合、特にそれがある。
- G：勉学より信仰の種を蒔いてくれて、その土台があってこそ今がある。日本のキリスト教が今あるのはそういったキリスト教理念に基づいた学校がたくさんあったから。その一つに学べたということに感謝。自由な中にいつでも場を提供してくれて、自分たちが選び取れるのが青短だった。
- H：すごく真面目で内気な感じだったが、短大に入って寮にも入って、いろんな人と関わって性格が変わった。やっぱり都会は違う、人を変える。
- I：出雲駅伝のおかげで青山学院が有名になる前は、青短は「東京の短大」とひとくくりにされ、島根の短大と扱いは変わらなかったが、今は青山学院だと言って損をしたことはない。
- J：短大の2年を外したら自分の若い時のことを考えられない存在。得た物が大きい。あの学校に入ってやはり良かった。この年になると、皆さん修羅場をくぐりながらご自分の品性を保っていらっしゃる、自分もそうなりたいと思う。

8. まとめ

第1期（昭和20～30年代卒業）に続けて第2期（昭和40年代卒業）の調査と取りまとめを行い、いくつかの考察結果が得られた。

まず、第2期が対象とする世代は、1966年に教養学科が加わり5学科体制となった青短で学んでいる。教養学科の開設は、短大の2年間で幅広い学問分野に触れることを可能に

した。青短は教育理念に「高度な教養教育を授ける」と謳っており⁵、学科を問わずそれを理念としていたが、「教養」を掲げた学科の誕生は、教養教育を目指す短大の姿勢をより鮮明に印象づけることになっただろう。その後1989年に6番目の芸術学科が誕生するまで23年間の5学科体制が、短大発展期の姿であったことを振り返ると、それが短大の一つの完成形だったといえるのかもしれない。

次に、短大や学科の選択理由に第1期との違いがみられる。女性は短大卒の方が四年制より就職しやすかったということは第1期の調査でも聞かれ、それが社会一般の傾向だった。それに対して今期の調査では、自分が目指す業界で短大卒が活躍しているので短大進学を決めたという理由や、青短においては英文学科の求人が多いことが学科選択の理由として語られた。開学して15～20年経ち、青短卒業生の社会における評価が高まっていたことも背景にある。また何より初めから卒業後に働くことを前提として進学することが、女性の進路の選択肢に加わっている。高度経済成長期の後半、高等教育を受けた女性たちが結婚、出産前の一定期間であったとしても、経済成長の大きな潮流の中で、その教育をベースにそれぞれの役割を果たしていたといえるだろう。

一方、生涯学習や地域活動、教会奉仕の取り組みは第1期と同様である。結婚生活に経済的余裕があり、専業主婦であること、子育て・介護を終えて時間的余裕があることがそれを可能にしているケースが多いが、「社会とつながりたい」という思いがその原動力になっている。短大の教育、2年間の経験から得た自信、卒業後も続く友人や教員らとの交流がその思いを支えているのも、第1期と変わらない。

9. おわりに

本調査では、青短がその理念にもとづく教育を行ってきたこと、その理念を卒業生たちがそれぞれの生き方や、家庭、地域、社会の活動において体現していることが、あらためて確認されている。卒業後何十年も経て人生を振り返ったときに、気づき、腑に落ち、ネガティブな体験もひっくり返り、自らの人生が豊かなものになっていることを実感している。もちろん調査に協力する卒業生は、そう感じているからこそ協力されているのであって、そうでない人生を送っている卒業生もいるだろう。それを差し引いても、青短が担ってきた女子高等教育の意義を、本調査が明らかにしている。プロジェクトに携わる責任を肝に銘じて、進行中の第3期にも取り組んでいきたい。

[注]

- 1 八耳俊文. 展示パネル「教養学科の誕生と発展」.「青山学院女子短期大学70周年記念ギャラリー展 vol.2『青短の誕生と発展』」. 展示期間：2019年10月28日～11月22日. 展示場所：短大北校舎2階廊下

2 輪島達郎. 調査報告書2025年4月16日

本研究では聞き取り調査を担当した研究員が調査報告書を作成し、プロジェクトメンバーで共有している。Q 1～Q 6の質問事項ごと聞き取り内容をまとめ、最後に分析・考察を行い、A 4サイズ2～4ページにまとめている。

3 小林瑞乃. 調査報告書2024年11月27日

4 輪島達郎. 調査報告書2025年8月1日

5 青山学院女子短期大学教育理念

女子短期大学は、青山学院のキリスト教信仰にもとづき、「女子小学校」から「青山女学院」を経て現在に至る本学院の女子教育の伝統を継承し、女子の高等教育に専念する。本学は、愛と奉仕に生き、社会のあらゆる局面で積極的な貢献をなし得る覚醒した女性の育成を目指し、現実に即した有用な専門の学芸のみならず、全人的で世界的な視野に立つ高度な教養教育を授ける。